
《餓鬼草紙》(京都国立博物館蔵)の制作背景について
—大徳寺伝来《五百羅漢図》を手がかりに—

《餓鬼草紙》(京都国立博物館蔵)は、岡山・曹源寺に伝わった全7段の絵巻物である。第1段では、食水餓鬼が川を渡った人間の足から滴る水を舐め、第2段では、同じく食水餓鬼がにぎやかな寺門前で水供養の水を求める。第3・4段は目連が餓鬼道に堕ちた母を救う説話を、第5段は恒河に集まった五百もの餓鬼が仏の説法を聞いて昇天した説話を描く。第6段は焰口餓鬼が阿難に救いを求める場面、第7段はその救済方法が後世の比丘に受け継がれたことを描く。

この絵巻については、『正法念処経』『仏説盂蘭盆経』『大般涅槃経』『救拔焰口餓鬼陀羅尼経』などに基づいていることや、各段の画風が異なっており複数の制作者が関わった可能性があることなど、重要な指摘がなされてきた。なかでも、本巻が《餓鬼草紙》(東京国立博物館蔵)《地獄草紙》(奈良国立博物館蔵・東京国立博物館蔵)《病草紙》(京都国立博物館ほか蔵)などともに、平安後期に高まった浄土信仰の中で、厭離穢土の思想を表現する12世紀末の作品として位置づけられたことは重要である。特に、福井利吉郎氏が『尊性法親王書状』を根拠にして、これらの絵巻が「六道絵」として蓮華王院に納められていた可能性に言及したことは、本巻を浄土教的文脈において、六道思想の産物として理解する方向を決定づけたといえる。しかしながら、上野直昭氏が指摘するように、本巻は餓鬼の救済の方法や過程を描いており、その点においてほかの宝蔵「六道絵」との隔たりがあるように思われる。そこで本発表では、描かれた餓鬼の系譜を手がかりに、本巻が浄土教信仰の文脈とはまた別に、どのような背景のもとで制作されたのかを考察する。

そのために、第一に、本巻には、従来の浄土教的な発想だけでは理解しづらい、図像的な曖昧さがあることを指摘する。すなわち、第2段に描きこまれた仏画の尊格が明瞭ではない点をはじめとして、第5段の如来の持物が楊柳と鉢である点、その額に白毫がない点、菩薩の昇天が右上に向かう点などである。第二に、このような曖昧さを明らかにするために、本巻に描かれた餓鬼の系譜に注目する。本巻の餓鬼は、造形的には中尊寺経ほかのものに類似するものの、それらはいずれも救済がない点で異なる。一方、淳熙5年(1178)以降寧波で制作され後に鎌倉に請来されたと伝わる大徳寺伝来《五百羅漢図》では、「水陸会」「施餓鬼」(大徳寺蔵)「施飯餓鬼」(ボストン美術館蔵)の幅に、救済を受ける餓鬼という共通の主題が見出だせることを示す。第三に、この主題の類似性を手がかりとして、《五百羅漢図》の背景にある水陸会という先祖供養の儀礼に注目する。後に寺院で先祖供養を執り行うことになる禅僧の盛んな南宋文化摂取を踏まえると、本巻の成立に新来の禅宗的文脈が深く関わっていることが指摘できる。最後に、以上の観点は図像的な曖昧さを考える際の手がかりにもなることを示す。